

小さな弟、良ちゃん

小川未明

青空文庫

良ちゃんりょうは、お姉さんねえの持もっている、銀ぎんのシャープペンシル
 がほしくてならなかったのです。けれど、いくらねだっても、お
 姉さんねえは、

「どうして、こればかりは、あげられますものか。」と、いわぬ
 ばかりな顔かおつきをして、うんとはおつしやらなかったのです。

お姉さんねえは、良ちゃんりょうをかわいがっていました。英ちゃんえいや、
 義雄さんよしおよりも、かわいがっていました。それは、良ちゃんりょうはま
 だ小ちいさくて、やっと今年ことしから学が校っこうへ上あがったばかりなのです
 の。

「お姉さんねえ、その光ひかった、鉛筆えんぴつをおくれよ。」と、また思おもい出だ

したように、お姉さんねえのところへやってきました。いままでにも、だめといったのが、無理むりに頼めばたの、しまいにはきいてもらえただで、シャーペンペンシルにしても、いつか自分じぶんのものになると思おもったからです。

「こればかりは、だめよ。」と、お姉さんねえは、おっしやいました。「だめ？」じゃ、ちよつと僕ぼくに見せておくれよ。」と、良ちゃんりょうは、小さい手てを差し出だしました。

「だめよ。なんといつても、これは、良ちゃんりょうにあげられません。お姉さんねえが、使つかっているのですもの。」

「見みせて、おくれよ。」と、良ちゃんりょうは、けっして、自分じぶんのものにはしないから、ただ手てに取とらしてよく見みせてくれないかという

ことを、かおいろ顔色あらわに現あらわしていいました。

「ええ、見みせてあげますわ。けれど、あげるのではなくてよ。」
と、いって、お姉ねえさんは、ハンドバッグから、シャープペンシルを出だして良りようちゃんの手てにお渡わたしになりました。

良りようちゃんは、いつかもうして、無むり理うつくに美しい、コンパクトの容ようき器きをもらつたことを思おもい出だすと、今こんど度も、これをもらえるのではないかと思おもいましたから、

「僕ぼく、これほしいな。」といつて、銀ぎんの軸じくに小ちいさな英えいご語ごの彫ほつてあるのをじつと見みていますと、

「こればかりは、いけないの。」と、お姉ねえさんは念ねんを押おすようにおっしやいました。

「僕の持つもっているもの、お姉さんねえにあげるけどなあ。」と、良ちゃんりょうは、いいました。

「ほほほほ、良ちゃんりょうは、どんなものを持つもっているの？」

「僕ぼくだいにじぼくにしているものがあるのだよ。」

「どんなもの、良ちゃんりょうのだいにじぼくにしているものつて、なんでしよう？」

「あれと代かえてくれる？」

「それはわからないわ。どんなものか、私わたし知らないのですもの……。」と、お姉さんねえは、良ちゃんりょうを見下みおろして、お笑いわらいになりました。

「こまと、水鉄砲みずでっぱうと、まりと、ろうせき……。水鉄砲みずでっぱうは、い

つまでも貸しておいてあげるから……。」「

「ほほほほ、良ちゃん、私、そんなもの、なんにするのよ……。」「
と、いつて、お姉さんは、良ちゃんのほっぺたをぷつと吹きまし
た。」

良ちゃんは、心持ち顔を赤くして、

「じゃ、みんなとなら、ペンシルと代えてくれる?」と、熱心に
いいました。

お姉さんは、かわいそうになりました。

「私、今日、デパートへ寄るから、良ちゃんにいいのを買ってき
てあげるわ。」と、お姉さんは、いいました。すると、たちまち、
良ちゃんの目はかがやきました。

「ほんとう？ お姉ちゃん、僕にぴかぴかした、シャーペンシルを買ってきてくれる？」と、良ちゃんは、急に元気になりました。

「ええ、きつと、光った、いいのを買ってきますよ。お姉さんは、お約束をして、うそをいったことがないでしょう？」

「うん。」と、良ちゃんは、うなずきました。そして、お姉さんの銀のシャーペンシルをお返ししました。

その日、お姉さんは、外からお帰りなされると、

「ぴか、ぴかしたのを、買ってきた？」と、良ちゃんは、飛び出しました。

お姉さんは、ニッケル製の子供持ちのを買ってきてくださいま

した。良ちゃんりょうちゃんは、喜んでよろこ、

「どうも、ありがとう。」と、いつて、お姉さんねえにお礼れいをいいました。そして、それをさつそく洋服ようふくのポケットに差さして、お友ともだちに見みせようと遊びあそびに出でました。

「良ちゃんりょうちゃんには、光ひかつていけば、みんな銀ぎんになつて見みえるのね。」と、お姉さんねえは、その後ろ姿うしすがたを見送みおくりながらおつしやいました。お姉さんねえには、その無邪気むじゃきなのが、なんとなくいじらしかったのです。

きょうも、また、良ちゃんりょうちゃんは、兄あにの英ちゃんえいちゃんに、釣つりにつれていつてくれと、泣なかんばかりにして頼たのんでいました。

「やだ、おまえひとり一人ひとりでゆけばいいだろう。だれかお友ともだちを誘さそつ

て……。」「と、英ちゃんえいは、いつていました。

「ねえ、つれていつてよ。」「と、良ちゃんりょうは、頼たのんでいました。

英ちゃんえいは、釣りつりざおの糸いとをしらべたり、浮うきをつけかえたりしていましたが、

「もう生意なまいき気なことはいわんな。はいといえばつれていつてやる。」「と、いいました。

「もういわんから、つれていつてね。」「

「ああ、よし。」「

「うれしいな。」「と、良ちゃんりょうは手てをたたいて飛とび上あがりました。

「みみずを取とりにゆくのだから、これを持もつておいで。」「と、英ちゃんえいは、いいました。

小さい良ちゃんちいりようは、片手に紅茶こうちやの空きかんあを持ち、片手に手シヤベルにぎを握にぎつて、兄にいさんのお供ともをしたのです。

「まあ、威張いばっているわね、にくらしい。」

窓まどから、小さな兄ちい弟きょうだい、二人ふたりの話はなしをきき、出でてゆく後ろ姿うしすがたが見送みおくつていたお姉ねえさんは、いいました。

そのうちに、二人ふたりは、みみずをとつて、帰かえつてきました。

「お母かあさん、早くはやご飯はんにしておくれ、みんなと釣つりにゆくのだから。」と英えいちゃんが、いいました。

「良りよう二三ぞう、途とちゆう中ちゆうで帰かえるなんていつたら、なぐるぜ。」と、英えいちゃんがいいました。

「ああ、いいよ。」

これをきいていたお姉さんは、もうたまらなくなりました。

「良ちゃん、釣りになんかゆくのをおよしよ。」と、お姉さんは、いいました。

「なんで？ 僕、ゆきたいんだもの、いつてはいけないの？」と、良ちゃんは、泣き出しそうになりました。

「だって、そんなにまでしていききたいの？」

「うん、ゆきたい。」

「じゃ、いらつしやい。英ちゃん、あんまり良ちゃんをしかつたら、ひどいから。」と、お姉さんが、いいますと、

「じゃ、つれていつてやらないよ。」と、英ちゃんは、いいました。良ちゃんは、泣き出してしまいました。そのとき、お母さん

が、

「さあ、ご飯はんができましたよ、仲なかよくしていつていらつしやい。」
と、おつしやいました。良りようちゃんは、ご飯はんを食たべる間あいだも英えいちゃんの機嫌きげんをとつていました。

そのうちに、みんなが外そとへ迎むかえにきました。二人ふたりは「いつてま
いります。」をしました。

「気きをつけてね。」といつて、お姉ねえさんとお母かあさんは、見送みおくつて
くださいました。

英えいちゃんは、さおを持もち、良りようちゃんは、片手かたてに、みみずの入はいつ
た紅こうちや茶あの空あきかんを持もち、片手かたてにバケツをぶらさげていました。
ほかの男おとこの子こたちも、さおとバケツと紅こうちや茶あの空あきかんを持もつて

いました。

お姉ねえさんは、これまで見たみ、紅茶こうちやの空きあかんといえ、たいていりプトンであつたのが、いつのまにか、みんな和製わせいを使用しようするようになったとみえて、リプトンの空きあかんは、一つもないと思おもわれました。ここにも、世よの中なかの变化へんかがあらわれているような気がきしました。

「良りちゃんは、さおがないの？」と、お母かあさんが、おききなさると、

「こんなものに、なにが釣つれるかつて……。」「と英えいちゃんが、笑わらいました。

「まあ、ご苦勞くろうな、ただバケツを持もつてお供ともをするだけなの。」

と、お姉^{ねえ}さんは、ほんとうに、良^りちゃんがかわいそうになりました。

はや、みんなの姿^{すがた}は、かなたの道^{みち}の上^{うえ}に小^{ちい}さくなりました。

「かわいそうに、それをつれてゆくとか、ゆかぬとか意^い地^じ悪^{わる}をし
てき。」と、お姉^{ねえ}さんは、涙^{なみだ}ぐみました。

「いえ、みんな小^{ちい}さいうちは、それで楽^{たの}しいんです。大^{おお}きくなる
と、わかってきます。」と、お母^{かあ}さんは、おっしやいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「子供のテキスト」

1935（昭和10）年8月

※表題は底本では、「小《ちい》さな弟《おとうと》、良《りよ
う》《ちゃん》となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さな弟、良ちゃん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>